

全国念佛行脚

—知られざる教化の歴史とエピソード—

【青森教区】

貞伝上人（一六九〇—一七三一、以下敬称略）は陸奥国津軽外ヶ浜の北辺、今別村（現今別町）の生まれとされる。本覚寺二世（後に弘前誓願寺八世）である安貞上人に師事し得度した。宝永元年（一七〇四）、名越派本山の磐城専称寺に入寺し、十五年の修学を経て、二十九歳の時に郷里へ戻り、今別本覚寺の五世となつた。以来、四十二歳までの十数年という短い住持ながら熱心な布教活動を行い、その教化は津軽の貧しい人々のみならず、アイヌの人々や松前・蝦夷地にまで行きおよんだという。

その布教の様子は、弟子である忍秀（本覚寺六世）が言い伝えたものを、京都獅子谷の宝洲が『貞伝上人東域念佛利益伝』二巻として書きまとめており、上巻は主として念佛の功德による病気平癒・災難よけなどの靈驗譚やイナゴに対する虫供養、下巻は金銅塔婆の造立と臨終の様子や信者との関わりなど、その行徳を讃える内容がつづられている。

中でも、経文を書いた石を津軽海峡の湾内に投げ入れて昆布を根付かせて良質な漁礁をつくつたというエピソードは地元でも特に有名であり、『うみにさかながやつてきた』（作／古屋道雄・絵／赤星亮衛）と

いう絵本の題材にもなつてゐる。また教化のみならず、植林等の治水事業を行うなど地場産業の育成面にも大きく貢献し、本覚寺の中興とされている。

享保十一年（一七二六）に発願した青銅塔婆（県重宝）が貞伝の最晩年に造立された。正面には名号と『無量寿經』第十八願の文（「唯除五逆」以下を除く）、背面には三種の長さの名号が浮き出しの鏡文字で付され、左側面には蓮華勝会の由縁、右側面には「專持名号以称名故諸罪消滅即是多善根福德因縁」という、いわゆる二十一字増の『阿弥陀經』の経文が刻まれ現存している。すなわち、法然上人は『選択集』にお

いて、宋代の淨土教者・王日休の『龍舒淨土文』に記される襄陽龍興寺にあるという二十一字増の石刻阿弥陀経の存在を紹介し、これを根拠として念佛が他の諸行と比して多善根であることを主張した。日本では、

ここ他に福岡の宗像神社に二十一字増の『阿弥陀経』の石刻碑が残されている。

青銅塔婆の二十一字増の刻文については、平成二〇年の夏に松永知海上人（佛教大学教授）が来寺した際にご教示いただき知るところとなつた。正徳四年（一七一四）、大本山百万遍知恩寺に宗像神社の模刻碑が建立されており、またそれ以前に宗像神社碑の拓本がかなり出回つて売買されていたというので（原田大六『阿弥陀仏經碑の謎』六興出版、一九八四）、年代的にもおそらくそのあたりから派生した情報にもとづくと思われるが由来は不明である。ただし、青銅塔婆は宗像神社碑を忠実に模刻したものではなく、願文は第十八願のみ正面に付し、さらに淨土三部經および善導大師の文句が四面に散りばめられている。折しも、平成二十一年に本覺寺で行われた貞伝上人二八〇年遠忌法要では、二十一字増の

『阿弥陀経』を読誦し、貞伝が當時願いを込めて残し伝えたであろう念佛多善根の教えが現代において活生するという大変な妙縁となつた。

その青銅塔婆の余り地金で鋳造された「万体仏」と称される一寸二分の阿弥陀尊像の約一万体は、有信の人々に与えられ、ニシン漁等の漁師たちには海上安全の護身仏とされた。海難のお守りとしての信仰は、津輕はもとより北前船の海路たる越前・越後から礼文・利尻にまでおよんでいたようで、近年、北海道の海岸で多々発見される万体仏は「貞伝仏」とも呼ばれている。北海道との縁はことさらに深く、年代は不明であるが有珠善光寺に住持したとも伝えられる。また、不詳ながら貞伝作とされる仏像・書画等が地元のみならず北海道にいたるまで各地に残されており、小樽市の中洞宗寺院である宗円寺の五百羅漢の作成にも関与したという。

儀礼の面においても、貞伝は大波・中波・小波の抑揚を節で模した独特的の音声による念佛を、双盤を用いて奏したという。これは「三遍返しのお念佛」と通称され、

現在も僧俗一体のお念佛としてとなえ継がれて往時の響きを偲ばせている。

（文責 工藤量導）

